

第3回日本サケつりサミット in 茶路川

サケつり河川関係者会議（サミット）

日本のサーモンフィッシングを考える
～サーモンフィッシング振興と地域の活性化を目指して～

☆協議結果の記録

1. 日 時 平成21年 9月 5日（土）14：00～17：00
2. 場 所 北海道白糠町アイヌ文化拠点施設「ウレシパチセ」
3. 出席者 42名

{	参加5河川関係者	—	北海道：忠類川、茶路川、浜益川
			青森県：奥入瀬川 福島県：木戸川
	水産庁、北海道庁関係者		

4. 協議結果

(1) サミットの趣旨について

◇全国サケつり河川協議会 会長代理 藤本副実行委員長（主催者あいさつ）

- ・サケつりサミットの主旨は、全国の各河川が持つ課題、取り組み、今後サケつりをどうしていくかなどということについて、各河川の担当者がざっくばらんに意見交換し、話し合う場所をつくりたいということで、平成19年に第1回目を忠類川で開催し、今回が第3回目を迎えたものである。



◇開催担当河川 白糠漁協 柳谷組合長
（開催担当者あいさつ）

- ・これからは各河川が共存共栄していくため、手を結び協力して「日本の川でのサーモンフィッシング」を盛り上げていくことが必要ではないか、そのためには何をすべきか、などの意見交換の場として、この度第3回目となった「日本サケつりサミット」が開催されることとなった。
- ・各河川ともに課題は多いが、この事業は国民が魚、自然に親しむものであり、漁業者の方々がつくった魚を活かしている画期的な事業である。課題を解決し発展させていかなければならず、サミットはそのために行うものである。

◇開催地 白糠町 棚野町長（歓迎のあいさつ）

- ・サーモンフィッシングが多くの皆さんに支援され、愛されるものとしていくため、

全国のサケつり河川が手を結び協力して日本のサーモンフィッシングを盛り上げていくことが必要であり、そのためにサケつりサミットを開催する意義がある。サケつりサミットの成果に期待している。

(2) 各河川の状況報告、課題等について

①忠類川

ア 状況報告

- ・忠類川の特徴のひとつは増水する度に川の流れが大きく変わることである。今年は6月以降雨が非常に多く、川の状況が昨年と全く変わった。
- ・忠類川では地元の釣り愛好家が「忠類川指導員」となり、ボランティアで様々な取り組みを行っている。ごみ拾い、根掛かりしたルアー等の回収、植樹、タックル検査、修学旅行の受け入れなどについて説明
- ・忠類川は自然産卵が多く、カラフトマスはすべて自然産卵であり、サケの自然産卵も多く12月まで遡上している。
- ・キャッチ&リリース区域においては、ほとんどの人がリリースしており問題はない。忠類川は下流はリリース区域、上流は魚を持ち帰る区域と区域分けをしており、うまく回っている。キャッチ&リリースを取り入れたことによって、マナーの良い人が増え、何としても魚が欲しくて引っ掛けてまで持って帰る人が減った。

イ 課題

- ・サケの遡上が安定しないことがあり、サケが少しでも増えて欲しいので、自然産卵を見直すことが必要ではないかと考えている。
- ・忠類川周辺にはヒグマが多いため、ヒグマの行動を管理している地元NPOの協力をいただき、釣り人の安全確保に努めている。
- ・事前申し込み制がまだ浸透しきっておらず、未だに申し込んでいないがサケ釣りをしたいという人がいる。事前申し込みを承知してもらうために、沖釣りをする際は事前に船の予約をするがサケ釣りもそれと同じであるということを説明している。



②浜益川

ア 状況報告

- ・今年から上流200mをキャッチ&リリース区間にした。これはリリースしたいという人の要望に応えることと、引っ掛け釣りを防ぐことを目的としている。その区間は水深が浅く、以前から引っ掛け釣りが多く引っ掛けた魚を持ち帰りたい人が多く入る場所であるが、リリース区間にしたことにより魚を持ち帰ることができなくなっ

たため、今のところ人が入っていない。

- ・ルール違反者をなくするため、昨年から常連の釣り人に「ボランティア指導員」の任務を依頼し活動していただいている。
- ・収入が減少しており、赤字を出す訳にはいかないなので、今年から料金を 1,000 円値上げした。料金を高くしたことによる影響は今のところ特にない。
- ・ルールの統一が必要ではないか。あの川では良いがこの川ではなぜだめなのかという人がいる。ルアーから針先までの長さの規定を茶路川さんと同じにしようかと考えている。
→ 引っ掛け釣りを防止するため、ルアーから針先までの長さを 7cm 以内にするこ
とで両河川のルールを統一することにした。

イ 課題

- ・申し込んだ人のうち実際に参加するのは半分程度に留まっていることが課題である。
- ・引っ掛け釣りや5尾以上持ち帰る人など、ルール違反が跡を絶たず、これに関する苦情が多い。また、引っ掛け釣りの人の中には非常にうまい人がいて、小さいフライで一発で引っ掛けるなど非常に巧妙なため、対応に苦慮している。

③奥入瀬川

ア 状況報告

- ・奥入瀬川の特徴のひとつは、増水が減多にないことであり、増水のために釣りが中止になることがないことが利点である。
- ・12月下旬の遅い時期までサケが遡上し、サケ釣りを楽しむことができる。
- ・地元のボランティア団体「グリーンクリーン奥入瀬川」の皆さんが川の清掃、流木の撤去、根掛かりしたルアー等の回収を行っており、ボランティアの皆さんに支えられている。

イ 課題

- ・課題は、釣り人への周知、正確な情報提供、釣果の安定、新しい参加者を増やすことなどである。



④木戸川

ア 状況報告

- ・申込者のうち1割が県内、9割は県外であり、そのうち7割が関東圏である。
- ・当選してもキャンセルする人がいるので、キャンセルを考慮して1日の定員は43名だが2割増やして54名を当選させている。実際に全員来たとしても60人は入れるので問題はない。

イ 課題

- ・近年はサケの遡上がだんだん遅くなってきたため、シーズンの初めの時期の釣果が良くないことが課題である。

⑤茶路川

ア 状況報告

- ・河口の近くから釣りができるので、半分は遡上したての銀毛の魚である。アメマスも釣れ、根強い人気がある。
- ・地元の釣り愛好家の皆さん 16 人がボランティアで指導員となり、毎日のように川を訪れて釣り方や仕掛けのルールについて指導している。
- ・釣った魚の 1,000 本目ごとに釣った人に記念品を渡す催しを行っている。

イ 課題

- ・最大の課題は雨が降ると川がすぐ濁り、釣りを中止にせざるを得ないことが多いことである。



(3) 各河川が協力してできる取り組みについて

①申し込み受付体制の協力について

(茶路川、忠類川より報告)

- ・ホームページで申し込みを受け付ける際、忠類川への申込者には「茶路川にも申し込みますか」という選択肢をつくり、茶路川への申込者には「忠類川にも申し込みますか」という選択肢をつくって、お互いに簡単に申し込めるようにしたところ、お互いに申込者が増え相乗効果が得られたことについて、参考事例として報告した。

②イベント的な取り組みについて

(全国協議会事務局より)

- ・サミットを開始した当初から、すべての川で釣った人を表彰するとか、全国サケつり名人決定戦などのような全河川が協力したイベント等を実施することが理想としてあるが、各河川の担当者の方と連絡を取るとそれぞれ河川の事情が異なることがわかり、全河川が足並み揃えて取り組むにはまだまだ時間がかかると感じた。しかし、こうした取り組みができればサケつり全体を盛り上げることになり、理想はヤマメつりのように多くの人が気軽に親しめる釣りにしたいということであることから、時間はかかるが皆で何かに取り組むということを理想としながらできることから少しずつ進めていくということではどうか。

→ 出席者了承

(4) 意見交換

①参加者増大のために参加手続きの簡素化は必要かということについて

(全国協議会事務局より)

- ・各河川からの意見の中に「当日申し込んですぐできる体制にできれば運営が安定するのでは」という意見が複数ある。忠類川では道庁の協力をいただいて申込締切日を増やし、申込から参加するまでの期間を短くして対応しているが、未だに申し込んでいないが参加したいという人がいる。理想的な方法のひとつとして、随時受け付けをして何日か前までに申し込めば参加できるというシステムがあるが、これは現在の特別採捕許可ではできないかもしれない。この件について皆さんはどのように考えているか。

(出席されている河川のうち、浜益川、木戸川からは当日許可を望む意見が出ており、奥入瀬川は当日許可を実施している。)

↓

(茶路川)

- ・その日すぐできることは良いことだが、誰でも簡単にいつでもすぐできるようにするとルール・マナーを守れない人が出てくる。ルール・マナーを守ってもらうためには事前に申し込んでルールを読んでもらい、心構えをしてもらうことが必要である。事前に申し込む手続きがあることによって釣り人がルールを守りマナーが良くなった。めんどろではあるがこのシステムは続けていくべきであると思う。理想を言えば5日間～1週間でライセンスが出るようにできれば良いと思う。

(北海道庁)

- ・当初、北海道が水産庁に川のサケ釣りをやりたいという話を持って行った時、初めはとんでもないことという話で全く理解が得られなかったが、次第に理解が得られ何とか調査事業を開始することができた。しかし、今も水産資源保護法というしほりがあるので何でもやれるということにはならず、ある程度の規制の中で実施することは止むを得ないことをご理解願いたい。北海道では、申込みから参加までの期間については特別採捕の書き換え交付申請許可を支庁権限に下ろして時間の短縮を図っている。

⇒ 結論としては、河川によって、当日参加を望む意見と、ルールの遵守を優先的に考え事前申込制は必要である、という2通りの意見に分かれている。

②ルール・マナーの問題について

(水産庁)

- ・本事業の基本はルールを守った中でサケの有効利用を図るということであり、観光は副次的なものである。
- ・ルールをこまめに変えると釣り人はついていけないので、なるべくルールは変えな

い方が良い。また、全河川の統一ルールがあれば最も良いと思う。

- ・サケつりをするためのルール・マナーとして釣り人にこのようなことを守って欲しいと周知したいことがあれば、報道者に話して周知してもらってもできるので、何かあれば言っていただければ協力したい。

(忠類川) 引っ掛け釣り用のギャング針が釣具店で売っているが、取り締まることはできないのだろうか。

↓

(北海道庁) 北海道海面利用協議会などからも釣具店にお願いしているが、店に置いていただけならば違法にはならず、撤去することができない。使わないと取り締まることはできないので、対処が非常に難しい。今は釣具店に周知し、警告文を置いたりしているが、置かないようにしてくれるかは釣具店によって異なる。

(忠類川)

- ・決められたルールの中で釣ることが大事であると教えることが必要であり、教育が問題である。引っ掛け針などを使ってはダメなことを教えることが必要であるが、今は教える場所がない。
- ・皆で体験学習の場をつくり、子供たちにルールを守る釣りを教えることが必要なのではないか。

③キャッチ&リリースについて

(白糠漁協定置部会)

- ・私はリリースはするべきではなく釣った魚はおいしくいただくべきだと思うが、本州の川ではキャッチ&リリースをさせている川がないが、どのような理由で禁じているのか。

↓

(木戸川)

- ・木戸川では捕獲施設の下流で釣りをしているが、県の指導で遡上した魚はすべて捕獲し増殖用親魚として使用することになっているので、釣り人がメスを釣った場合は生かしてイケスに収容してもらいその魚は採卵に用いており、オスはすべて持ち帰ってもらっている。

(忠類川)

- ・北海道と本州はシステムが異なり、北海道ではあくまでも余剰資源の利用という考え方により増殖しない川でサケ釣りを実施しており、増殖河川では増殖するというように川を区分している。本州では増殖河川でサケ釣りを実施しており、メスは増殖用親



魚に使用して釣りに人も捕獲を手伝ってもらっているような形である。

(白糠漁協定置部会)

- ・リリースされた魚が活着しているかという問題もある。リリースするよりも釣りに食べ方のレシピを渡すなどして食べてもらうことに努めて欲しいと思う。

↓

(忠類川)

- ・忠類川ではリリース区域を設定し、リリースする区域と持って帰る区域を分けているが、リリースされたサケは実際にほとんどが生存している。また、メスザケの残卵数の確認も行っているが、95%が正常に産卵している。サケは思う以上に強く、きちんと再生産しているようである。
- ・忠類川でも釣った魚をおいしく食べてもらいたいという考えが開始当初からあり、地元加工場で有料で加工する業務を行っているが、まだ多くの人には認知されておらず、未だに課題になっている。

④その他

(忠類川)

- ・忠類川では海外からの参加者が増えている（アメリカ、香港、韓国、スウェーデンなど）。今年中止になったが韓国からのツアーの計画もあった。東南アジアでサケつりができるのは日本だけであり、魅力があれば外国からの参加者が増える要素があり、まだまだ夢と可能性がある。

(5) 次年度の「サケつりサミット」について

☆第4回サミット開催地 福島県木戸川

◇木戸川漁協渡辺組合長より次期開催地代表のあいさつ

- ・2年前に組合長になってから、木戸川の良さを発揮していかなければならないと考え努力しているが、木戸川の遡上数は増えており昨年は12万7千尾となった。木戸川の河口では地引き網で1回に2,000尾もサケが捕れる。これから最も必要なのは人づくりであり、木戸川漁協では若いスタッフを3名雇用し、事業が何とかやれる体制になった。今はサケの加工について勉強しているところである。次回のサミット開催にあたっては、一生懸命努力して皆さんをお迎えしたい。



5. サミット会議終了後 地元の郷土芸能披露

「白糠アイヌ文化保存会」の皆様よりアイヌ民族の伝統芸能である楽器「ムックリ」の演奏などを披露していただいた。

